



営農情報

「あまおう」3月の管理

第57号 平成29年3月6日

南筑後普及指導センター
福岡大城農業協同組合

10a 当たり収量 5t 以上を目指しましょう

1 生育状況

2番果房は、早期作型で1月下旬から2月上旬、普通作型で2月上旬～2月下旬が収穫の中心となり、2月上旬から中旬にかけて2番果房の出荷が多くなりました（図1）。

3番果房の出蕾については、過去2か年と比較して早期作型ではやや遅く、普通作型ではやや早くなっています（図2）。

病害虫については、ハダニ類やアブラムシ類の発生が増加しています。

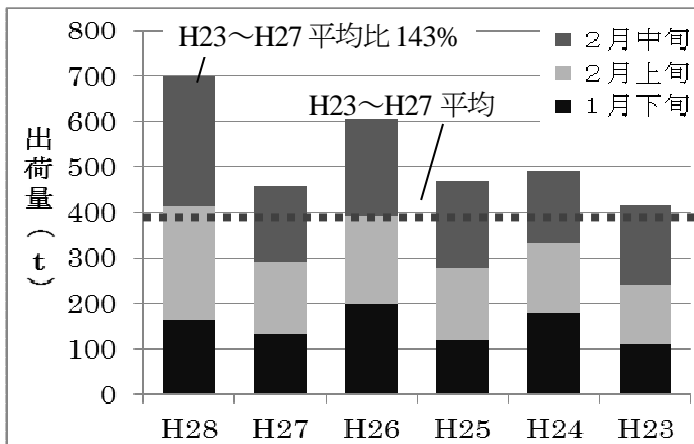


図1 1月下旬から2月上旬の出荷量の年次比較
(南筑後普及指導センター管内・JA全農ふくれんデータ)

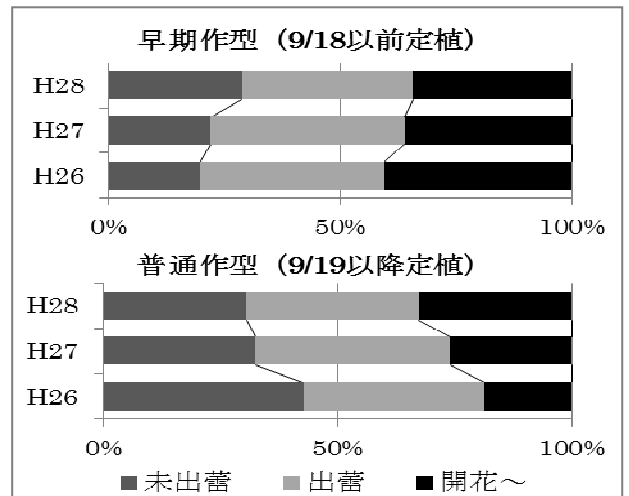


図2 3番果房出蕾状況（調査期間：1/30～2/6 南筑後普及指導センター管内）

2 気象予報と今後の見通し

(1) 気象予報

福岡管区气象台が発表した1か月予報は下図のようになっています。

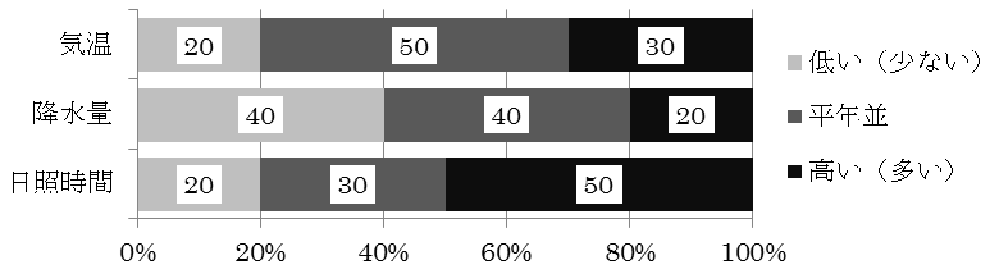


図3 1か月予報（九州北部地方 予報期間：2月25日～3月24日 発表日2月23日）

(2) 今後の見通し

管理ポイント：草勢コントロール・病害虫対策・親株管理

2番果房の芽の揃いが良く、玉伸びもしたため、2番果房の着果負担が例年より大きいと見られます。このことから、3番果房の果実肥大不足が懸念されるため、2番果房の果梗枝の除去や3番果房の摘果を速やかに行いましょう。

また、3月からスリップス類の発生が見込まれます。早期発見、早期防除を心掛けましょう。

3 今後の管理

(1) 温度管理

- ・ 日中は、サイド・谷・妻面を開放して換気を行い、低めの温度管理を行う。
- ・ 夜温7℃以上の日は、夜間もハウスを開放したままにする（雨天日を除く）。

表1 3月以降の温度管理の目安

午前	午後	夜間
18℃～20℃	18℃以下	5℃（夜温7℃以上は開放）

(2) 電照管理

- ・ 草勢を見ながら徐々に電照時間を短くし、3月中下旬を目安に心葉の展開が外葉より高くなりかけたら終了する。
- ・ 電照終了後、心葉の伸びが悪くなった場合や、展葉速度が極端に遅くなった場合は電照を再開する（2時間程度）。

(3) かん水

- ・ 1回当たりのかん水量が多いと、収穫時の果実傷みの原因となるため少量で回数を多く行う。
- ・ かん水の目安は、pF値1.7～1.8とする（朝、葉つゆをうたないようであれば土壌が乾燥している）。
- ・ 果実品質維持のため、収穫直後に行う。
- ・ 水分不足は、果実肥大不足や乾燥によるダニ類の多発要因となりやすいので注意する。

(4) 施肥

- ・ 液肥は、窒素成分で1か月当たり1～2kg/10aを2～3回に分けて施用する。
- ・ 3月末を目安に施用を終了する。

(5) 株整理

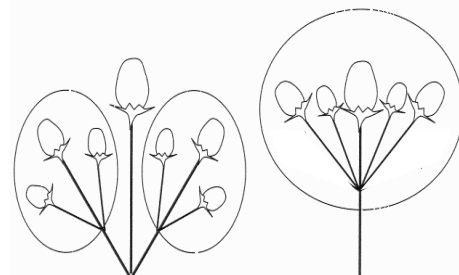
- ・ 収穫が終了した果梗は、傷果防止と次果房の出蕾促進のため速やかに除去する。
- ・ 枯葉や黄化した葉のみを除去し、一気に葉を除去しない。

(6) 摘果

- ・ 3番果房の摘果は、果梗の形に応じて行う。また、草勢が弱い場合（心葉の葉柄長9cm以下）は着果数を減らす。

【 1枝当たりの着果数目安 】

通常果梗：3果/枝
かんざし果梗：4～6果/枝



通常果梗

かんざし果梗

図4 果梗形状に応じた摘果

(7) 炭酸ガス施用

- ・ 換気が頻繁にされるようになると、炭酸ガス施用の効果が小さくなる。
- ・ 夜間もハウスを開放する時期（3月中下旬）を目安に施用を終了する。

（裏面へつづく）

(8) 病害虫防除

① ハダニ類

- ・ 下葉の除去後、葉裏や葉縁に十分薬液がかかるように丁寧に散布する。
- ・ ハダニ類の多発した株は、特に強めに葉かぎをした後に防除をする。もしくは株ごと除去してハウス外に持ち出す。
- ・ 葉かぎしたあとの残渣は、ハウス内に放置しない。
気門封鎖型薬剤の卵に対する効果はほとんど無いため、気門封鎖型薬剤は5～7日おきに複数回（2～3回）散布を行う。

② スリップス類

- ・ 発生が少ないうちは、IGR 剤（マツチ乳剤、カウンター乳剤（共にミツバチ影響日数1日）等で防除し、多発した場合には、スピノエース顆粒水和剤（ミツバチ影響日数3日）アーデント水和剤（ミツバチ影響日数2日）、ディアナSC（ミツバチ影響日数3日）等を用いて防除する。
- ・ ハウスの換気時間が長くなると、外部から飛び込む可能性が増加するため、特にサイド側や妻面付近の株に注意する。
- ・ ハウス周辺の雑草からハウス内に侵入するため、ハウス周辺の除草を行う。

③ アブラムシ類

- ・ 発生が見られており、今後、気温上昇と共に増加する。油滴状の排泄物や幼虫の白色の脱皮がらが付き、果実の汚れなどにつながるため発生に注意し防除する。

④ うどんこ病

- ・ 夜温が上昇し、生育が軟弱徒長気味になると発生が多くなる。
- ・ 電気加熱式くん煙器や、定期的な薬剤散布による予防に努める。

⑤ 灰色かび病

- ・ 多湿条件で発生が増加するため、曇雨天の前などは予防的な薬剤散布を行う。
- ・ 発病後は、早急に被害果実を取り除き薬剤による防除を行う。

(9) 親株の管理

① 病害虫防除

- ・ 下葉の除去後、炭そ病とハダニ類の防除を行う。
- ・ ランナー発生前から7～10日に1回を目安として薬剤散布を行う。

② かん水・施肥

- ・ ランナー発生期の4～5月に乾燥すると、採苗時期の遅れや採苗本数不足の原因となるため、事前にかん水施設を準備する。
- ・ プランターやポットは乾燥しやすいため、こまめにかん水を行う。
- ・ プランターやポットの場合は、4月上旬までにIB化成S1号を1株あたり5粒、5月上旬までに1株あたり5～10粒の追肥を行う。

③ その他

- ・ 土耕ほ場では排水対策用の溝を必ず整備する。
- ・ ランナー発生を促進する必要がある場合（定植遅れ、展葉が遅い等）はジベレリンを50ppmで茎葉散布する。

特集「“あまおうブランド”を守る 春先の果実品質保持対策」

春先は気温上昇に伴って、収穫から調製、流通の途中で果実の傷みなどが発生しやすくなります。春先の果実品質向上は市場からも要望が強く、「あまおう」のブランド力を維持するには産地が一体となって品質向上に取り組む必要があります。

春先の果実品質保持対策について改めて確認して、先に述べた温度管理やかん水管理の他に、以下のことに取り組みましょう。



1 収穫

- ・ 収穫遅れによる過熟を防止するために、部会の着色基準に従って収穫する。
- ・ 果実が硬い午前10時までに収穫作業を終わる。
- ・ 収穫箱内での果実の積み重ねを行わない。

2 予冷

- ・ 収穫後は速やかに予冷する。
- ・ 予冷库の温度は2～3℃にする。
- ・ 果実を2時間以上予冷库で冷やした後に、パック詰めを行う。

3 遮光

- ・ 塗布剤（クーラーコートなど）をハウス外面に鉄砲噴口などで塗布し、ハウス内の温度上昇を抑制する。1回目：3月中旬、2回目：4月中旬に分けて薄く塗布する。

産地全体の努力で、あまおうブランドを守りましょう！